

困り感を持つ子どもへの作業療法支援

灘 裕介 (有)あーと・ねっと作業療法士

作業療法は決して訓練や練習ではありません。遊びという作業を通して日常生活の中の困り感や苦手な事象の解決を進めるものです。子どもの行動には必ず理由が存在し、その理由を見つけ、解決につなげます。

子どもの発達には、身体の発達と心の発達です。心の発達とは脳の発達で、脳と身体をつなぐのが感覚です。脳科学研究においても身体を動かすことが脳を育てると言われていますし、身体を動かすことが感覚を感じるようになります。感覚には、五感（見る、聞く、嗅ぐ、味わう、触れる）に加えて、重力を感じる前庭覚と筋肉や関節から動きや圧を感じる固有受容覚があります。

前庭覚と固有受容覚と触覚の3つの感覚は、身体（ボディイメージ）を育てる感覚です。子どもは、ボディイメージが曖昧だと描画で人の身体を描けなかったり、どのように身体を動かせばいいかわからないので運動したがらなくなります。また、運動のイメージが捉えられないことから言葉や概念が育ちにくなります。ボディイメージは運動や器用さに関係し、指示の理解や応答にもつながっています。他にも抽象思考や概念理解として、「大きい」「長い」「短い」なども動きが伴いながら身体を通して理解しています。

感覚欲求は誰にでもある生理的欲求です。一般的な趣味や癖に現れそれだけでは足りないを補おうとし、子どもには神経系を安定させる作用がありますので、周囲からみれば困った行動でも、子どもにとっては問題解決行動になります。例えば、多動な子どもは、動くことで脳に刺激を送り充電して機能させています。その子に「動かないで」「今はじっとする時だよ」と言ってしまうと充電ができず、結局、脳が力を発揮できません。このような子どもには、しっかりと充電するために、じっとする前に存分に脳と身体を使ってしっかりと感覚を感じ取る遊びをしてください。

就学前施設の先生方の専門性と今日の私の話のいいところを組み合わせながら、これからも子どもたちを捉えていただければと思います。いいところを保育に組み込むことで、子どもの見立てが広がると思います。

大人にも困り感と同じようにあり、誰にでもあって特別なものではありません。これを、医療の場では障害と言いますが、私は、一人一人の個性だと見ていますし、その個性の中に困り感の強さ弱さがあると考えます。困り感を持つことは誰しも等しいことですし、私は、その中で強く困っているのであればお手伝いしたいと思っています。